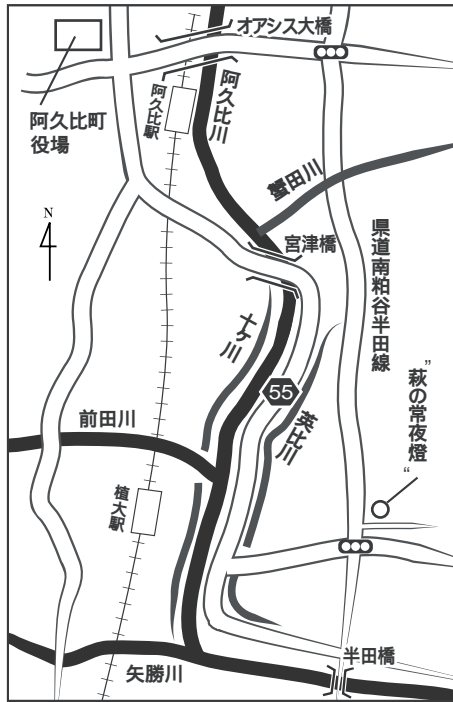
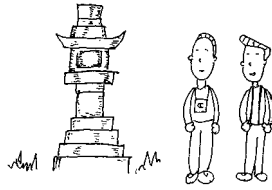


シリーズ

阿久比を歩く ⑤6

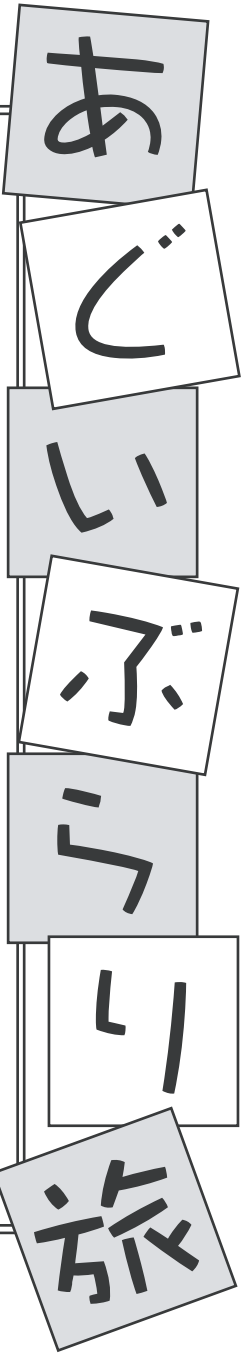


前方後円墳の二子塚古墳

半田橋付近から県道南粕谷半田線を北に向かう、ぶらり旅に出掛けた。天候は曇り。湿度が高く蒸し暑い。少し歩くだけでじっとりとした体中が汗ばんでくる。昨晩見た悪夢（思い出せないが、うなづいていたらしく妻に鼻をつままれ目を覚ます）で寝汗をかき、首の周りにできたあせもがヒリヒリする。

日曜日で休診の病院の駐車場で、スズメ同士が地面に降りてけんかをする珍しい光景を目にする。口ばし

阿久比の道を行く(県道南粕谷半田線)



お互い違う方向に飛び立って行く。ガソリンスタンドの奥に、常夜燈が見えたので、県道から少し東へ足を運ぶ。神社ではよく見かけるが、道に立つものは珍しい。通称「萩の常夜燈」と呼ばれる。

常夜燈横に看板があり、いわれの説明がある。建造は大正五年。伊勢皇大神宮への献燈として、伊勢の国を望むように西向きに造られ、「伊勢大神宮」と文字が刻まれる。昭和十五年まで村で当番を決め、それぞれの家が毎晩交代で火をともし、一晚

を突っつき合う、激しいけんかだ。友人が「恋敵同士のけんかですかね」と話しかけてくるので、夫婦げんかならあそこまでしないだろう。多分、恋敵の戦いだな」と言葉を返す。「ところで、家庭で夫婦げんかはしませんか」とプライベートなことを聞いてくる。「僕は妻の言うことは、右から聞いて、左に受け流すようにしているから大丈夫」と夫婦円満の秘けつを話している途中でスズメたちはお互い違う方向に飛び立って行く。



「萩の常夜燈」

中暗い道を照らしていたよつだ。二人で後ろを振り返る。「この先に伊勢神宮があるのか。よし。手を合わせるか」。何を願ったのか聞かなかったが、友人は白い歯を見せて笑っていた。

北へ向かう。宮津地区に入る。蟹田川付近で足を休める。西の方角には田園風景が広がる。東の方角には川を挟み、南側は昔ながらの板壁の民家が並び、北側は区画整理が進み新しい町並みが生まれつつある。

前方後円墳の二子塚古墳を横切り、オアシス大橋東交差点まで来て、今日のぶらり旅を終える。

首筋が汗でヒリヒリするので、昨晚の思い出せない悪夢のことを友人に話す。「夫婦円満と言っていましたか、本当は奥さんとけんかして、ひっつかれたあとじゃないんですか」と言われ、「違つよ。これは、あせもだ」とむきになって首筋を見せた。